

## 【子どもの転落・転倒事故に関する救急統計について】

子どもの転落・転倒事故を予防するため、過去5年間における、郡山地方広域消防組合管内の当該事案の救急統計を取りまとめましたのでお知らせします。

転落事故によって135人、転倒事故によって165人、合計300人が救急搬送されており、詳細は以下のとおりです。

※ 過去5年間（平成29年から令和3年まで）の郡山地方広域消防組合管内の救急事案における統計。

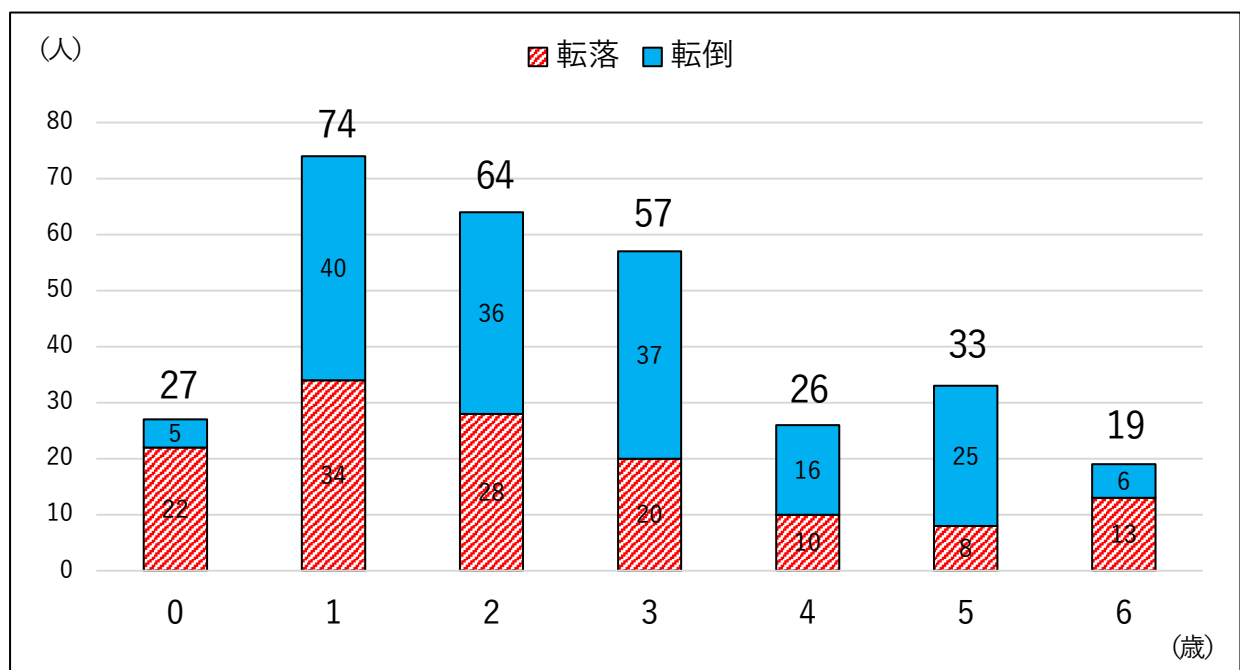
※ 0歳から6歳までの年齢区分を抽出。

※ 小数点を含むものは小数第二位を四捨五入した数値。

### 1 年齢別の救急搬送人員

転落・転倒事故の年齢別の救急搬送人員をみると、「1歳」が最も多く74人、次いで「2歳」が64人、「3歳」が57人と続きます。

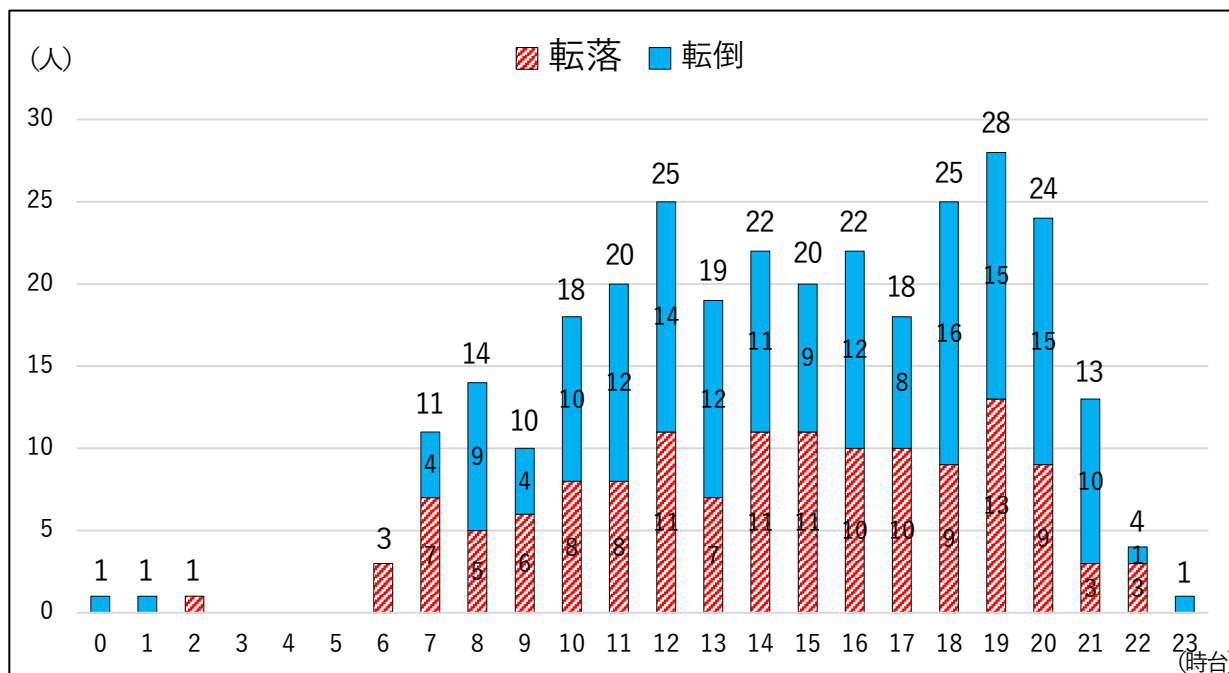
「1歳」から「3歳」で合計195人と全体の65.0%を占めており、転落事故、転倒事故ともにこれらの年齢が特に注意が必要なが分かります。



## 2 時間帯別の救急搬送人員

転落・転倒事故の時間帯別の救急搬送人員をみると、「19 時台」が最も多く 28 人、次いで「12 時台」と「18 時台」が 25 人、「20 時台」が 24 人と続きます。

傾向としては、午前より午後が多く、さらに夕方以降の夜に多いことが分かります。

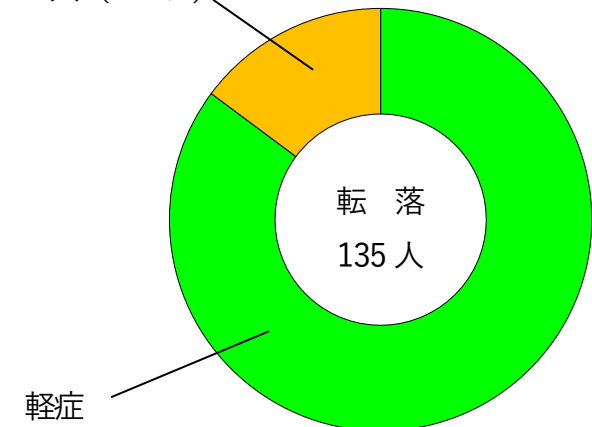


## 3 傷病程度別の救急搬送人員

転落事故、転倒事故それぞれの傷病程度をみると、転倒事故より転落事故の方が入院を必要とする中等症の割合が多いことが分かります。

中等症

20 人 (14.8%)



軽症

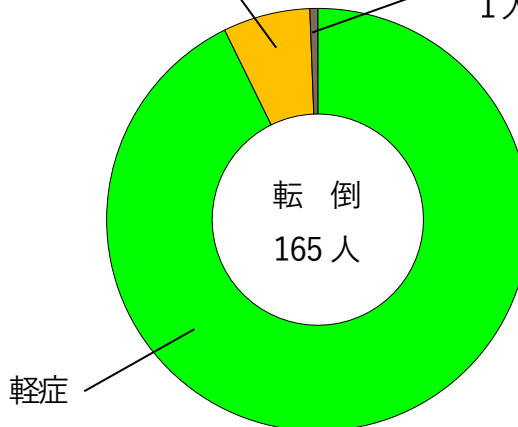
115 人 (85.2%)

中等症

11 人 (6.7%)

重症

1 人 (0.6%)



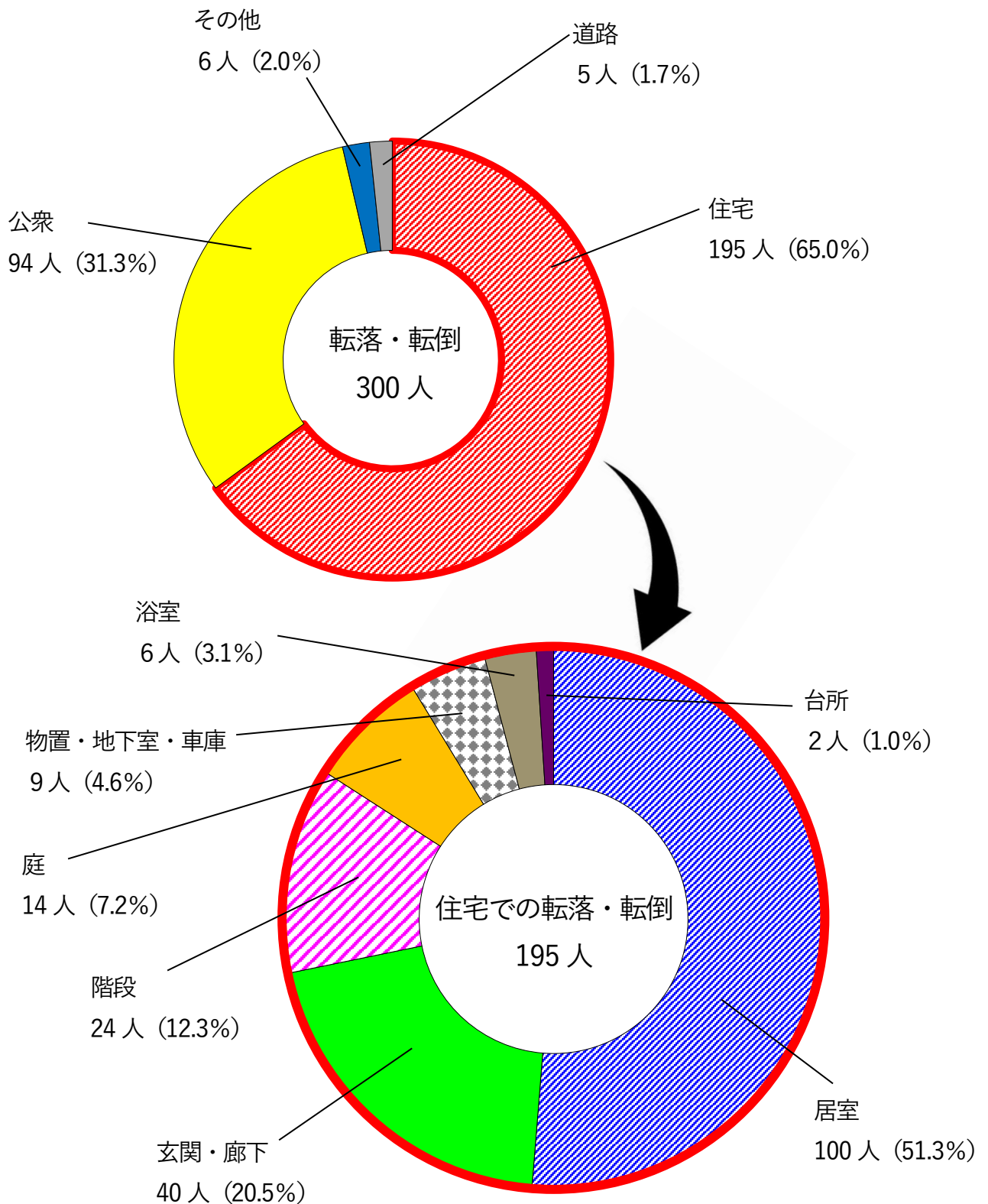
軽症

153 人 (92.7%)

#### 4 発生場所別の救急搬送人員

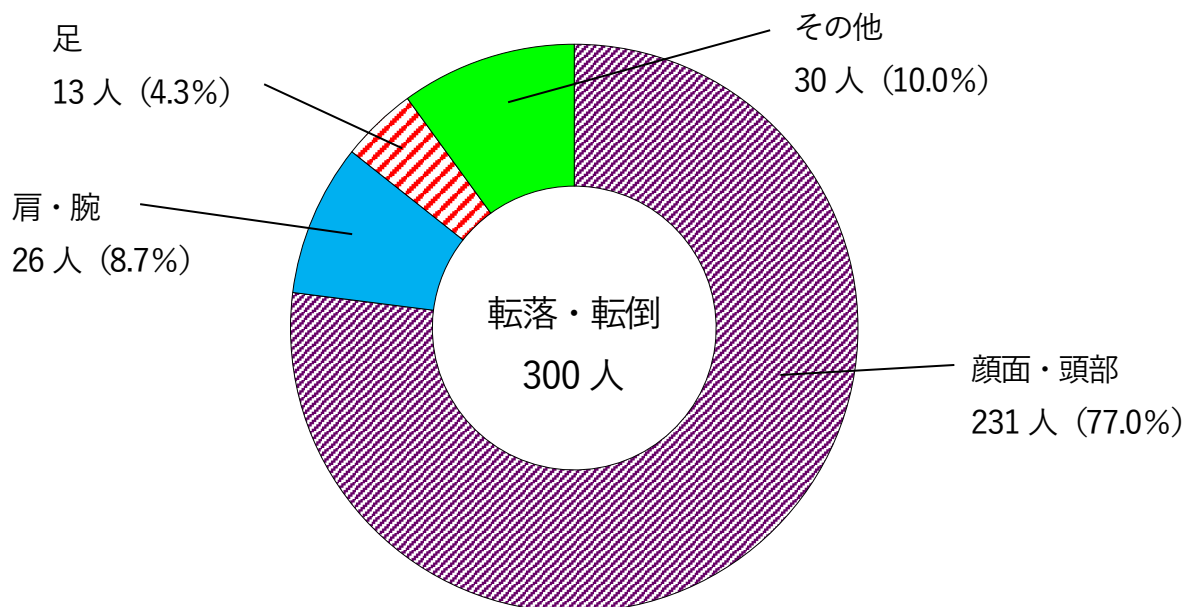
転落・転倒事故の発生場所別の救急搬送人員をみると、「住宅」が最も多く195（65.0%）、次いで「公衆」が94人（31.3%）と続きます。

「住宅」をさらに細分化してみると、「居室」が最も多く100人（51.3%）、次いで「玄関・廊下」が40人（20.5%）、「階段」が24人（12.3%）、「庭」が14人（7.2%）と続きます。



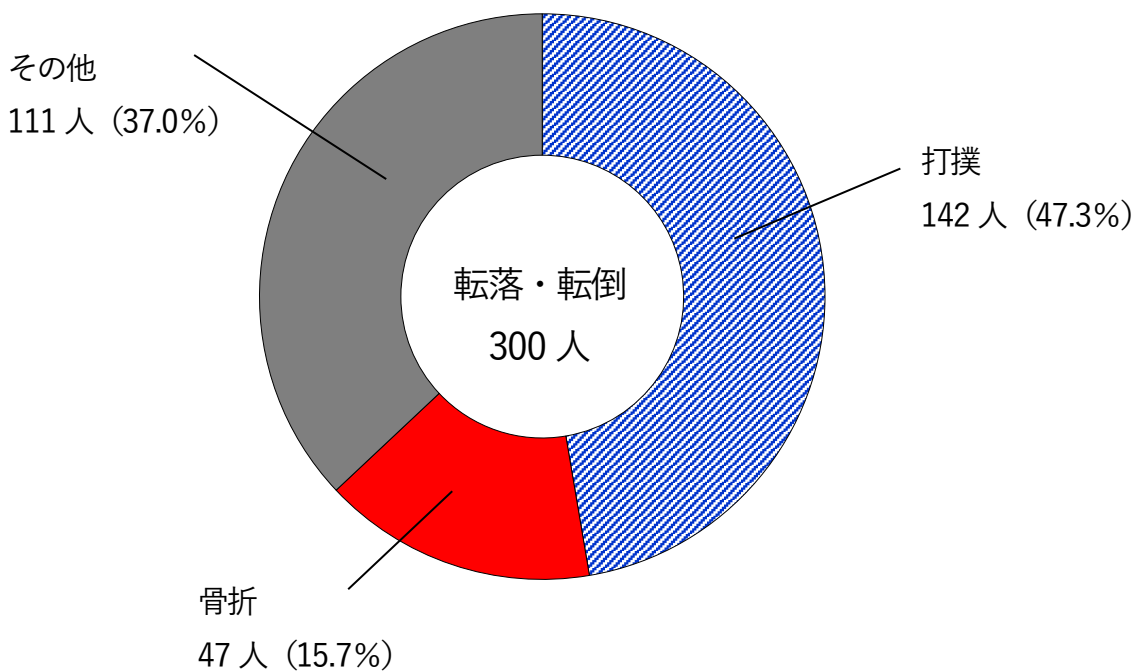
### 5 怪我の部位別の救急搬送人員

転落・転倒事故の怪我の部位別の救急搬送人員をみると、「顔面・頭部」が最も多く 231 人 (77.0%)、次いで「肩・腕」が 26 人 (8.7%)、「足」が 13 人 (4.3%) と続きます。



### 6 怪我の内容別の救急搬送人員

転落・転倒事故の怪我の内容別の救急搬送人員をみると、「打撲」が最も多く 142 人 (47.3%)、次いで「骨折」が 47 人 (15.7%) と続きます。



## 7 過去の事故事例

- ◆ 1歳の女児が自宅2階リビングの吹き抜けから誤って柵を乗り越え1階に転落（頭蓋骨骨折、中等症）
- ◆ 1歳の女児が自宅マンションの3階窓から2階の屋根に転落（頭部打撲、中等症）
- ◆ 4歳の女児が外出先で食事中、椅子から転落（上腕骨骨折、重症）
- ◆ 3歳の女児が自宅リビングで椅子から転落（頭蓋骨骨折、中等症）
- ◆ 2歳の女児が自宅1階の出窓から転落（頭部打撲、中等症）
- ◆ 5歳の女児が公園の遊具から転落（頭部打撲、中等症）
- ◆ 6歳の男児が自宅リビングの遊具から転落（手首骨折、中等症）

## 8 子どもの転落・転倒事故を防ぐために

周囲の大人等による見守りとともに、転落・転倒事故が起きない環境づくりが大切です。

- ◆ 自宅内を常に整理・整頓し、物によるつまずきを防ぐ
- ◆ 電気コードによるつまずきを防ぐため、 unnecessary コードはコンセントから抜く
- ◆ 窓、網戸、ベランダの手すり等に劣化がないか定期的に点検する
- ◆ 窓やベランダの手すり付近に足場になるようなもの（段ボール箱。プランタ、新聞の束）を置かない
- ◆ 窓を開けた部屋やベランダでは小さな子どもだけで遊ばせない
- ◆ 子どもが勝手に窓を開けたり、ベランダに出たりしないように、窓には子どもの手の届かない位置に補助カギをつける
- ◆ 小さな子どもだけを家に残して外出しない

